

一般の部

入賞

広島県知事賞

サカナの神様

昨夜残したサカナの、骨に
そっくりの形をしたあなたと出逢ったのは
深い ふかあい 海の底

つまむと粉々に砕けそう
だからどんなに注意深く暮らしたことか
あなた、覚えているか？

メガヘルツのさきつぼで
ちらつちらつと光って魅せた
震えながらも知らせてくれた
「ここにいるよ」の確かな鼓動

安芸郡坂町 石口 阿希

まもなくあなたには
巨大な眼球が生えてきて
朝に夕にぎよろつとこちらを見据えた
ますますわたしはそおつと
息をひそめた

やがて身が付きサカナは泳ぐ
ピチャッピチャッ
わたしの体内を堂々と陣取り
ぐるりんと回転する肉体を得た

うごく、たたく、
蹴とばす、おどる、

あの晩残したサカナの骨は
この世でいのちを再生した
わたしの子宮を選んでくれた

その日その時は水風船
ばとうーん どうるん どどどっぴよぶっ

「ふんねーい ふんねーえい」

て あなた、控えめに泣いたのよ

胸に置かれた灼熱の
ほんの2452グラムの
金塊のごとく重きかな！

この歎びを果たしてあなた、
なんと表現できようか！
なんと表現できようか！

空気に満ちたこの場所は
広い ひろおい 海のそと
サカナは鳥になりいつか羽搏く
あなたはわたしのもとを、去る

ぎゅっと抱きしめる
ぎゅうつとなお、力いっぱい抱きしめる
もはやあなたは壊れない
もはやあなたは壊れない

サカナの神様、叶うならもう少しだけ
このぬくもりに埋もれさせてください

どうかもう、
少しだけ――

広島県議会議長賞

千人針

庄原市 奥井 久子

「あつ これは 千人針」
庭木の間の草をとり進んでいると

ホッ ホッ ホッ ホッ

小豆粒くらいの朱い実が

土の上に放射線上に散っている

遠い昔の忘れ去っていた記憶

黄なりの木綿の布に赤い糸の玉結び

出征兵士の無事帰還を願って

女の人が一人一針 寅年の女の人は百針

あの千人針が 土の上に

弘三兄ちゃん（父の弟）に令状が来た

病弱の父に代わって

いつも支えてくれた弘三兄ちゃん

明るい笑顔だった祖母から笑顔が消えた

朝起きると祖母はいなかった

「ばあちゃん大丈夫かなあ リユウマチあるのに
千人針もらいに 行かれたよ」

母が言った

次の日も 次の日も その次の日も

祖母は出かけた

日が暮れるまで帰って来ない祖母
疲れきって帰ってきてても

目だけ光っていた

峠を越えてとなりの村までも

夜の暗いジャバラをつけた電灯の下

小さい手で わたしも千人針

母に助けられ玉結びをつける

わたしは寅年

百個もできるんだから

人指し指に赤い糸を巻きつけ

親指でずらし 丸める ひっぱる

縫いつける

何日かの夜を重ねて

百個できた

千人針を腰に巻きつけて
弘三兄ちゃんは出征していった

けれども帰っては来なかった

「仏領インド支那にて名譽の戦死」

小さな箱には紙切れ一枚

祖母は 何日も 何年も涙した

「千人針握ってジャングルの中を……」
そう言っては涙した祖母

『生きて帰るな 命は国のため奉げよ』の時代
生きて帰ってほしい

母の子に対する血の出るような心の叫び
それが千人針だったのだ

蟬の穴を数えながら 草を取り進む

今も続く戦争

戦場からの叫び声が聞こえたような気がした

七十九年目の八月六日が来る

現 代 詩 部 門

広島県教育委員会賞

山の畑で

世羅郡世羅町 高本 澄江

あれは確か

小学五年生の八月六日のことだった

そうだ、平和学習ということだ

全校登校日だったのだ

木造の講堂に全校児童集まって黙禱をした

その後 校長先生のお話を聞いたのだ

テレビも無く 新聞も読まない

十歳の夏だったのだ

「お父さんどうして大人は戦争はいやじゃ

止めてくれ。と言わんかったんじゃろう」

それまで板の間で昼寝をしていた父が

「バカか、知りもせんくせに偉そうな事を言うな。

戦争はいやじゃ?! 止めてくれじゃ!!

フン、言うとつたら、わしはここに居らん。

お母さんも居らん。お前もじゃ。」

「知りもせんくせに生意気な口きくな。」

「自由だ、民主主義だ。そんなものは、どこにあった!!
わしは知らん!!」

「生意気な口きくな。」

再び横に向いて昼寝を続けた父の背中に
深い傷跡があった

「兵隊さんに行つとちやつた時の傷じゃ
黙つとりんさい。」

母はおろおろとして言った

それまでも父は苦手だった私は

さらに父の側には寄りなくなつた

いつだったんだろう

特別高等警察のことを知つたのは

みんな黙つて戦争に協力荷担したんだ

従順さを装いつつ 腹の中で

「いやじゃいやじゃ。戦争を止めてくれ
と叫んでいたんだ

「何も知らんくせに生意気な口きくな」

今もあの時の父の顔が声が甦つてくる

「今のお前に何が出来る」

「やって見せる。」

父が怒りつつせせら笑っている

何でも自由に言え 発信も出来る今

私は何も出来ずに黙っている

戦争は止めろ 世界に平和を

爆撃は止めろ 多くの市民を殺すな

核は作るな 使用するな

でも黙っている 多くの言葉は知っていても

何の発信も行動もしない

八十二歳がここに居る

戦中戦後の厳しい農業者生活の中で

五人の子どもを育ててくれた

父の歳 母の歳を越えて

何もしない 出来ない私が生きている

七十九回目の終戦記念日を告げる

町の無線放送が

一分間の黙禱を促して

サイレンを吹鳴している

私は山陰かひの畑で掌を合わせ

目を閉じ口を閉じ耳を塞いで
ただ祈っている

現 代 詩 部 門

けんみん文化祭ひろしま実行委員会会長賞

葛

国道脇の歩道を歩く。左手には葛のフェンスが続いている。道路の反対側に並ぶ家と家の間に海が見える。金網を乗り越えて、垂れ下がる葛の葉叢を風が撫でて行く。風の去った先に、ふっと母の微笑む顔が現れて消えた。

丘の斜面を葛が這い登って行く。緩やかにカーブしながら上行するアスファルト道路の、ガード柵の白いパイプの間から、若葉を従えた葛の蔓先が幾つも覗いている。麓の畑で草を取る祖母の記憶が蘇ってくる。

山間の作業小屋の外に、夥しい数の葛の葉に覆われて、墳墓のように盛り上がった場所がある。濃緑色の闇の中に、鉄骨混じりのコンクリート塊や廃材や、錆びた機械部品等が埋もれている。森で働く父の気配がする。

三原市 長光 祐三

ネムノキが葛に取り付かれている。天辺まで覆い尽くした葛の葉は、隣のモチノキにまで広がる勢いだ。あちこちの葉陰から、長い花茎が斜めに突き出し、赤紫色の花を咲かせている。嫁いだ姉の着物の柄のようだ。

中低木をがんじ搦めに緊縛して、河川敷を葛が制圧している。運動場よりも広くてぶ厚い緑の絨毯の下で、植物群落がじっと息を潜めている。滴り落ちて来る僅かな光を測定しているのは、農業技師だった兄だろうか。

葛の茂みの中には、ゾウムシやカメムシや、クズノチビタマムシなど、いろんな虫がいる。バツタが飛び跳ね、暗い地面をへびやムカデが這っている。ネコが走り込み、イヌが鼻を突っ込む。時には私もいる。

海辺の廃工場の破れたトタン塀の下から、地面を匍匐し侵入して来る葛の蔓。採石場跡の廃電柱に、枯れた葛の葉が大きな塊を作り、

風に吹かれてカサカサ音を立てていることもある。いつか飛び去って行った、鳥の家族の巣跡のように。

現 代 詩 部 門

広島市長賞

じいじの森林は生きている

ぼくは、おじいちゃんのまねをして、どんぐりの木を「ぎゅ」とだきしめてはおずりしました。しばらく、そうしていると、どんぐりの木が、こういいました。

「えいせい、おじいさんのオニヤンマにはもう会えたか」

ぼくがくびをふると、どんぐりの木はこうおしえてくれました。

「あっちの小川の池のそばで、おじいさんのオニヤンマが生まれたぞ。もう、えいせいの家に向かって飛んでいるころだろうさ」

ぼくは、とてもうれしくなり、はやく家に帰りたくなりました。

「どんぐりの神さま、ありがとう」

そういうと、ぼくは力いっぱい山道を走りはじめました。トトは、どんぐりの木のまわりをひとまわりすると、すぐに、ぼくのうし

廿日市市 山田 宣昭

ろを走りはじめました。

木立をぬけて、森林もりの小道をたどり、森林もりの出口までくると、午後の日差しのなかを真っ赤にそめて赤とんぼの群れが空いっぱい飛びでいました。そのなかに、ぼくは黒いからだに黄色いしま模様の大きな目をした巨大なオニヤンマを見つけました。オニヤンマはゆうゆうと、ぼくにちかよってきました。

「じいじ」

と、ぼくは声をかけました。オニヤンマはぼくの顔のまんままできました。けれどもなにもいいませんでした。

「どんぐりの神さまにあつたよ。ぎゅと抱いたよ。じいじがしていたように」

そう、ぼくはいいました。

じいじのオニヤンマは大きな目玉をくるくるまわしました。

トトがしつぽをふっています。

ぼくは、うれしくてなんともなんともうなづきました。

そのとき、坂の下の家から声がありました。

「おーい。えいせいやーい」

おばあちゃんの声でした。

オニヤンマは、赤とんぼの群れの中に飛んでいきました。

その夜、ぼくは、おとうさんとおかあさんといっしょに星空をみていました。星はふるようにかがやいています。ぼくは、どんぐりの神さまのこと、じいじのオニヤンマのことをはなしました。おとうさんが、ぼくにこういいました。

「空の星もみんな生きている。森林もりもトンボもずっとずっと大昔からここにいる。トンボの祖先はなんでも2億年もまえから、この地球にいるんだそうさ。だから、また、来年もオニヤンマは、あの池のほとりの水の中で育って、こんどの夏も、また飛んでくるさ」

夏休みの終りの日、ぼくは、東京に帰った。帰りの車の中で、おばあちゃんのくれたおべんとうをあけると、おばあちゃんの手の大きさのおにぎりといっしょに、細長い茶色のどんぐりの実がひとつはいつていた。

現 代 詩 部 門

広島市議会議長賞

ドルフィン・セツシヨン

東広島市 高橋 克知

夏の昼過ぎ 公園の噴水前で
若い画家が通行人にお辞儀をすると
隣のキーボード奏者の演奏にあわせて
ライブペイントをはじめた

強い日差しにひたいをぬぐいながら
白いキャンバスいちめんを
インディゴブルーで塗りつぶし
昏い 昏い 海の底を描いた
土星の白い環があらわれた

潮鳴りのような
即興演奏のすきまから
なにを見つけたのだろう
画家はキャンバスを横に倒した
白い環からイルカの群れが躍り出た

空色のリネンシャツ

波色にひるがえるスカート

海岸を歩いていたのは誰？

目を閉じて思い浮かべていると

白い砂の譜面に 風が流れて

貝殻の旋律がきこえた

遠い日に 青くまたたく輪唱へ

光るイルカたちを描いていく

全身全霊で描いていく

何度目かの噴水が ぽーんと

セピオライトの積雲へ打ち上がった

いつしか ふたりの周囲には

イルカのひとだかりができていた

作業着のイルカがふたりの前にくると

ポケットから文庫本を取り出し

演奏にあわせて

イルカの言葉で朗読をはじめた

広島市教育委員会賞

黄色い花とトウモロコシと

五年生の時

教室の机は 二つずつくつつけて並んでいた

横の席にはだれかが座った

女の子はなにも持っていないなかったから

教科書は真ん中に置いて開いた

チューリップがいっぱい咲いていた

黄色く咲きかけた花を指さして

これきれいと言った

順番に黒板の前に立つように言われて

漢字や算数を書いた

女の子はいくら叱られても

分数が解けなかった

先生は汚れた髪の毛の端をつまんで

風呂に入って来るようにと言った

身体も臭いし 服も と付け足した

女の子は 隣の席に戻って来て

黄色いチューリップを指でなぞっていた

広島市 正本 忠臣

大きな街に仕事に行った

通りにはたくさんの人が行き交っていた
すれ違う人達の中に 若い女の人
がいて しゃがんで 道に落ちていた
ものを拾った

両端を持って 噛みただけれど
すぐに吐き出して捨てた

トウモロコシの食べかすで

白くて 実は一粒もついていなかった

振り返って その人を追いかけた

追いつくと

長い髪は汚れてばさばさしている

褪せたブラウスにスカートの裾は傷んでいた

自分が何がしたいのか分からなかった

立ち止まると その人はすぐ遠ざかり

人混みの中に紛れた

もう疲れたので 一人で席を立てて外に出た

狭い踊り場に 店の女の人が追って来て

カウンターの花瓶に挿してあった

黄色い花を手渡してくれた

エレベーターのボタンも押してくれた

賑やかな通りを横切って歩くと

灯りが途切れた先に川がある

長い橋を渡りかけて

歩き疲れて 欄干に両肘をついて休んだ

川は暗くて 川底は見えなかった

でも 対岸の建物の赤や青のネオンが

縮模様になって細く連なり

川底に届いていた

女の人が歩いて来て

欄干に両手を置いて 並んで川を眺めていた

しばらく黙ってそうしていた

狭い踊り場で手渡して貰った黄色い花を

女の人に渡して橋を渡った

隣の席に座った女の子とも

なんの話もしなかった

女の子はそのまま学校に来なくなったから

それからは教科書は自分の前で開いた

隣の席は今も空いたまま

もうあまりにも遠くなり過ぎて

分からなくなってしまうた

現 代 詩 部 門

公益財団法人ひろしま文化振興財団理事長賞

二〇二三年の油蟬

二〇二三年の夏

赫赫たる太陽

突き刺さる日射

地に乱舞する葉の影

朝、職場に向かう

自転車にまたがった

ふと気づく

前輪の横

一匹の油蟬が裏返っている

蝉嵐の中

私の心の中に

真夜中の川のような

深い静寂が流れゆく

その死の間際を想った

死に抵抗を続ける生存本能

薄暮のように淡い最後の鳴き声

最後の力を振り絞って地面をたたく羽

広島市 吉武 涉

何かをつかもうと動き続ける脚
透明な呼吸を重ねる腹

地球のように丸いその双眸に
最後に映ったのは

地上か

それとも

天空か

その沈黙に耳を傾けよう

二〇二三年は

G7広島サミットが開催された

世界の首脳が広島を訪れた

慰霊碑に花を捧げ

首を垂れて

死者を祈った

原爆投下から七十八年

何十万人の死

魔の弾は

肉を燃やし

骨に食い入った

慰霊碑の石室 原爆死没者名簿

公園の北西

原爆供養塔 七万人の身元不明者の遺骨

骨 骨 骨 骨 骨 骨 骨 骨

頭蓋骨 鎖骨 肋骨 骨盤 大腿骨

骨だけ残し

亡くなっていた被爆者たち

真夜中の川のような

深い静寂が流れゆく

地球のように丸い双眸に

最後に映ったのは何だったのだろう

その心に

最後に宿った思いは何だったのだろう

その沈黙に耳を傾けよう

現 代 詩 部 門

石

君の石ってどんな石？

よかったら僕に見せて欲しい

僕のはこの石みどり色

形はちよつと丸っこい

石には種類が沢山あるけれど

君の石が見てみたい

恥ずかしい？

大丈夫、前に出すだけでいいよ

キラキラの宝石じゃなくていいんだ

どんな石もそれぞれの良さがある

石ってすごいよ？

どんなに壊れたって無くならない

形を変えて集まって違うものになるんだ

だけど気を付けて

自分の石に色を塗り、無理やり削って尖らせて

すごいでしょ？ っていう人がいる

廿日市市 長代 明樹

いきなり蹴っ飛ばす人だっている
だから絶対自分の石は離さないで
相手の石に興味がないなら
君にとつてそれはただの石ところ
もしも見せたいと思つたら
そつと見せるだけでいい
そしたらきつと伝わるから
持つてない？
大丈夫、見えにくいだけ
小さかったり、透明な人もいる
すぐには難しくても
いつの日か見せてほしい
きつときれいだから

わたしの伯父のはなし

安芸郡海田町 竹野内康子

八月五日午後二時

私の歩いているのは

ひろしま

夏の色彩にあふれ

人たちの行き交う

おだやかで

にぎやかな街

忍び寄るものに

気づくわけない

七十九年前のその日

青い空の下の

ありふれた日常

before and after

一九四五年八月六日午前八時十五分

閃光とともに
途切れた時間
吹き飛ばされた命
焼かれた街の記憶

日常を一瞬で奪うもの
風景を地獄図に変えるもの
無垢の命を汚染するもの
七十九年後のいまも
苦しみ続けさせるもの
過去が未来となった
その日を想う

一九四五年八月六日八時十五分
伯父は職域国民義勇隊として
県庁近くで建物疎開の作業中
一瞬の光に焼かれ
人生を語り伝える骨もない

県北の農家の六人兄弟の一番上
一（はじめ）と名付けられたその人は
義眼の二十代の銀行員

弟二人は海と陸で戦死して
写真入りで新聞に載った
母と妻と幼い子どもと
残る三人の弟は
想いを堪えて戦後を生きた

before and after

一九四五年八月六日午前八時十五分

静かな故郷の山の上、
生きた証の墓標を立て
何年もの間
家族は骨を探し
思い出を語り合う
そのうち、
それぞれ年老いて
天に召されてなお
その人を探し漂う
ひろしまの空

現 代 詩 部 門

風とケダモノ

下手くそだから
風を抱きしめている
くるしい場所から
私を拐った
しずかな風を
恋人のようだとおもって
抱きしめている
いつのことだったか
オレンジの水彩絵の具が降る画面の中
私と風は手をつないで
いつそう顔を赤らめながら
一緒に家に帰った
そのことを
思い出せないけど
とてもよく覚えていて
そのときから
ほんとうは

大分県大分市 エキノコックス

家は安心できる場所なのだと知った
いつもの二倍 かなしい夜は
いつもの二倍 風を抱きしめよう
私は下手くそだったから
下手くそなりに生きることを選んだ
見つめ合うと
風と私は
いっそう顔を赤らめる
ケダモノは
醜いとおもっていた
安いベッドが軋む夜
私は
ひとつのケダモノとして
風を抱きしめている